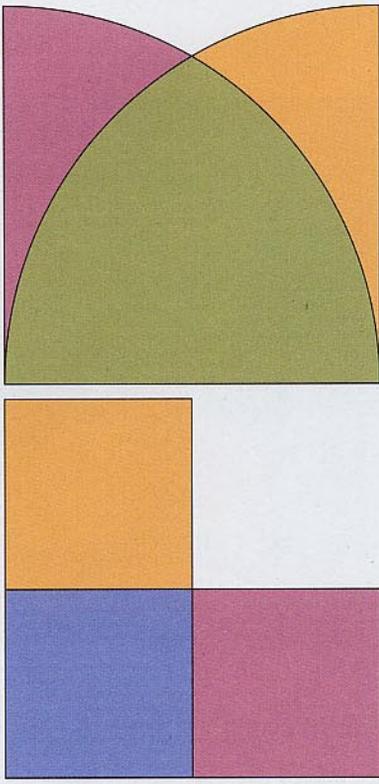


# ミュージアム・レター



Gakushuin University  
Museum of History

## Museum Letter No.9

発行日 ● 平成20年(2008)11月10日

もくじ

ごあいさつ	1
雅楽へのいざない	1
『源氏物語』千年紀 記念展示によせて	2
近世源氏絵の世界から— 史料館本「源氏物語画帖貼交屏風」の紹介	3
刊行物のご案内	4

### Information

#### 学習院大学公開講座 「源氏物語千年紀 記念シンポジウム」

平成20年(2008)12月10日(水)

第1部 16:00~17:00 雅楽公演

第2部 17:30~19:45 シンポジウム

会場 学習院創立百周年記念会館1階正堂

「記念展覧会 ~一夜限りの源氏ものがたり~」

会場 学習院大学北2号館1階史料館展示室

\*上記のシンポジウム・展覧会の詳細は本レター4頁をご参照ください。

## 1. ごあいさつ

平成20年12月10日(水)、学習院大学公開講座「源氏物語千年紀 記念シンポジウム」が行われます。世界最古の文学作品である源氏物語が成立して千年の節目を迎える今年、各方面からのご協力をいただき、企画・開催する運びとなりました。講座の第1部では、いちひめ雅楽会による「雅楽公演」、第2部では、三田村雅子氏(フェリス女学院大学文学部)・佐野みどり氏(学習院大学文学部)による「記念シンポジウム」が行われます。また、これに合わせて、史料館展示室において「記念展覧会~一夜限りの源氏ものがたり~」も開催いたします。

本号では、今回の講座に関連した記事を掲載いたしました。悠々と語り継がれる源氏物語の奥ゆかしさを感じていただければ幸いです。

(館長 井上勲)

## 2. 雅楽へのいざない

千数百年の歴史を有する雅楽は、東アジアより伝来した音楽と日本古来の歌舞が融合して成立した日本の伝統芸術です。雅楽には大きく分けて、舞踊を主とする舞楽と器楽演奏だけの管弦があります。

雅楽は平安貴族たちのたしなみでもあり、そのため古典文学には、雅楽についての逸話も多く見られます。『源氏物語』にも雅楽が登場するシーンがありますが、なかでも桐壺帝と藤壺女御の前で、光源氏と頭中将が「青海波」を舞う場面(紅葉賀)を思い浮かべる方も多いのではないのでしょうか。

かつてはあまり一般的でなかった雅楽ですが、日本の文化を見直す動きとあまって、最近では様々な団体による公演も行われています。本講座では、京都のいちひめ雅楽会に御公演をお願いいたしました。これを機会に、雅楽をお愉しみいただければ幸いです。

(野尻泰弘)



いちひめ雅楽会による「青海波」

### 3. 『源氏物語』千年紀— 記念展示によせて

『紫式部日記』寛弘五年(1008年)11月1日条に、次のような文章があります。

左衛門の督、「あなかしこ、このわりに、わかむらさきやさぶらふ」と、うかがひ給ふ。源氏に似るべき人も見えたまはぬに、かの上は、まいていかでものしたまはむと、聞きみたり。(口語訳:左衛門の督が、「失礼ですが、このあたりに若紫はおいででしょうか」と几帳の間からおのぞきになる。光源氏の君に似ていそうな方も見えにならないのに、まして紫の上がどうしてここにいらっしゃるのですか、と思って私は聞き流していた。)(引用は小学館、新編日本古典文学全集『紫式部日記』に拠る。)このように「若紫」、「源氏」と、『源氏物語』の登場人物が記録の上で初めて確認されます。その年から今年は1000年目。この節目の年を記念して今年には京都を中心に「源氏物語千年紀」のイベントが多数開催されています。今回のシンポジウム及び展示もこの「源氏物語千年紀」を記念したものです。

この展示に、日本語日本文学から学科所蔵の古典籍のうち三条西家旧蔵本をはじめとして、『源氏物語』に関連する古典籍およそ三十点を展示いたします。三条西家旧蔵本のうち、展示する古典籍の多くは室町時代に書写されたものであり、『源氏物語』の写本や、『源氏物語』の注釈書、系図など『源氏物語』に関連するものを幅広く取り上げました。『源氏物語』の写本といっても、その大きさや形状が異なるものがございます。袖の中にも入るような小さなサイズのものから、『源氏物語』一帖分を三巻の巻子本に仕立てたものまで、『源氏物語』の享受のあり方は多様であったことが、その形からお分かりいただけるかと思えます。

また、『源氏物語』よりも以前に作られた古典作品のうち、『源氏物語』にも影響を与えている『古今和歌集』や『伊勢物語』、ほぼ同時代に作られた『枕草子』も展示いたします。特に研究史上重要なものである、三条西家旧蔵の天福本『伊勢物語』と能因本『枕草子』も展示いたします。いずれも学習院大学図書館のホームページで紹介されておりますが、私たちが古典として享受している作品がどのように書写され後世に残されてきたのかを、ぜひ実物を御覧いただき確かめていただきたいと思います。

では、展示の一部を具体的にご紹介いたします。室町時代に書写された『源氏物語』の注釈書で「光源氏物語」(写真2左)と題された十四冊の本がございます。その十四冊の初めの一冊に『源氏物語』の最初の巻である「桐壺」があるのですが、その桐壺巻の部分だけが取り出され、「桐壺」(写真2右)と題されて、おそらく江戸時代に新たな一冊の本として書写されています。写真を見ただければ一目瞭然ですが、「光源氏物語」は小型の本、「桐壺」は大型の本です。『源氏物語』が時代を超えて、読まれ、勉強されていた証でもあります。このようにまったく違うサイズの本に作り変えることがあったという良い例でもあります。平安時代に書かれた物語が、室町時代から江戸時代へ、そして現代へと受け継がれてきた歴史を、この展示から感じていただければ幸いです。どうぞ皆様、お話しあわせのうえ、ご来場くださいませ。

(勝亦志織)



写真1 「伊勢物語」



写真2 「光源氏物語」・「桐壺」



左隻



右隻

### 4. 近世源氏絵の世界から— 史料館本「源氏物語画帖貼交屏風」 の紹介

華やかな王朝世界に彩られた『源氏物語』を描いた絵画は(源氏絵)と呼ばれ、その今伝わる数多くの作品は、この物語がいかにかたくさんの人々に求められ愛好されてきたかを、私たちに語りかけてくれます。ことに近世初期には様々なスタイルやバリエーションを持つ作品が、正系の土佐派や狩野派といったいわゆる一流の絵師だけでなく、彼らの周辺で活躍した者や、町絵師と呼ばれるような多様な描き手によってつくりだされました。ここに紹介する「源氏物語画帖貼交屏風」も、そうした近世源氏絵の受容と制作の、広やかな裾野に位置する一例です。

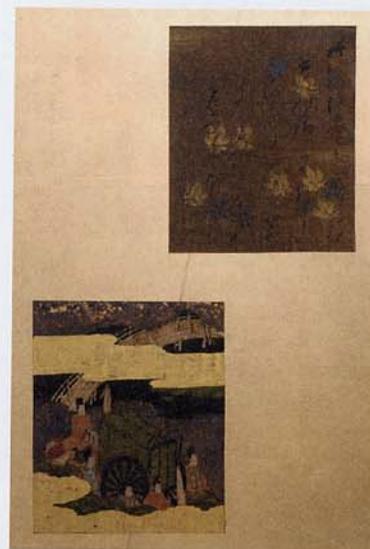
本作品は、詞十葉・絵十葉の画帖が貼り付けられた六曲一双の総金地屏風で、全五十四帖のうち、右隻には「御法」「橋姫」「行幸」「若菜上」「鈴虫」、左隻には「常夏」「幻」「竹河」「梅枝」「夢浮橋」の計十場面が順次貼られています。詞書と絵の色紙は各帖一葉ずつのセットで隣り合っており、詞章内容と絵画場面はおよそ対応関係にあります。縦長型の画帖の大きさはいずれも揃っていることから、もと冊子本の形式であったものが仕立て直されたと考えられるでしょう。

続いて絵画表現に目を向けてみると、土佐派による細密画の作例が想起されるような、やまと絵の雅味を感じる描写が確認できます。人物の面貌部分は特に剥落が進んでいるのが惜しまれますが、穏やかでやさしい顔立ちが、細かな描線の引目鉤鼻、僅かに朱がさされた口元、滑らかな顎の丸みの輪郭によって形作られています。またやや古様な趣を持つ金雲・金霞は、画面の上下を支える役割を未だ果たしており、構図やフレーミングに優れたセンスもみることが出来ます。その一方で、建物や細部装飾にしばしば認められる素朴な表現、樹木を描く重い筆致、泥絵具的な色感など、御伽草子の作例を思わせる描写も共在しています。こうした要素からは、土佐派の絵画を学んだ町絵師を、描き手に想定することができるでしょう。制作期はわりあい早い江戸初期頃であると思われます。

さて本図の興味深い点としては、それぞれの帖からどの場面を絵画化するのかにあたり、比較的珍しい場面が選ばれていること

が挙げられます。例えば「幻」には、あまり絵画化例のない、御仏名の導師の僧を源氏がねざらう場面を、「夢浮橋」は浮舟のいる遙か向こうの谷を、薫の行列が通る様をクローズアップで描いているのです。土佐派の主流である光吉や光則の画帖には見出せないこれらの場面の源泉を辿ってみると、伝土佐光元筆とされている作品との親近性が指摘できます。土佐光元(1530-69)は光茂の子で、いずれも画風が異なるいくつかの作品が彼の筆と伝えられています。そのなかでもことに室町末期から桃山時代に掛けて作られたとされる京都国立博物館本の「源氏物語画帖」と、当作品の場面選択と図様は、人物を大きく描く点、近接拡大の構図という特質も含め、通じているといえるのです。先に挙げた雲霞の表現も合わせ、この土佐光元筆の伝承作品に近い、やや古様な「伝」土佐派の系譜のなかで制作された作品であることも、本作の特質を考えるとときに見逃せないものでしょう。

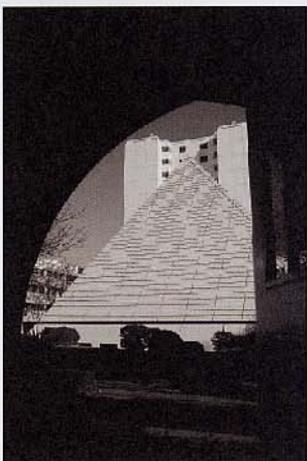
(岡本麻美)



左隻 第六層部分「夢浮橋」

## 5. 刊行物のご案内

前号「ピラミッド校舎解体見学記」でお知らせした写真集が刊行されました。スポーツカメラマンとして活躍する小城崇史氏が全点撮り下ろしたピラミッド校舎写真集です。各頁下には、固定カメラで撮影した連続写真が掲載され、パラパラと頁を捲るとアニメーションのように解体過程を見ることが出来ます。また、建物の図面(平面図・立面図・断面図)もあわせて掲載し、前川國男作品の記録としても興味深い内容となっています。



『学習院キャンパス写真集 ピラミッド校舎の記憶  
—前川國男作品・中央教室』

■学習院大学史料館刊 2008年8月刊行 1,000円



ご好評いただいた『写真集 明治の記憶』の続刊として『写真集 近代皇族の記憶 - 山階宮家三代 -』が刊行されます。

山階宮家は明治維新の国事に奔走した晃親王が創設した宮家。その宮家三代の方々から自ら撮影した宮邸内や学習院の生活や皇族たち、飛行機などの800点におよぶ写真を初公開。知られざる皇族の社会や日常生活をあざやかに映し出します。

学習院大学史料館編『写真集 近代皇族の記憶 - 山階宮家三代 -』

■吉川弘文館刊 2008年12月刊行予定 予価12,600円

## Information

### 学習院大学公開講座

### 「源氏物語千年紀 記念シンポジウム」

平成20年(2008)12月10日(水)

主催 学習院大学史料館

共催 源氏物語千年紀委員会 学習院大学文学部日本語日文学科

後援 豊島区

第1部 16:00~17:00 雅楽公演 管弦と舞楽

いちひめ雅楽会(京都)

管弦…越殿楽/舞楽…青海波・陵王

第2部 17:30~19:45 シンポジウム

三田村雅子氏(フェリス学院大学文学部教授)

佐野みどり氏(学習院大学文学部教授)

会場 学習院創立百周年記念会館1階正堂

入場無料 事前申込不要

### 「記念展覧会～一夜限りの源氏ものがたり～」

平成20年(2008)12月10日(水) 12:00~17:30

学習院大学史料館所蔵「源氏物語画帖貼交屏風」

学習院大学文学部日本語日文学科所蔵「源氏物語秘釈」など公開

会場 学習院大学北2号館1階史料館展示室

入場無料

### ミュージアム・レター第9号

2008年11月10日発行

〒171-8588

東京都豊島区目白1-5-1

電話 03(3986)0221

内線 6569

FAX 03(5992)9219

Gakushuin University Museum of History

学習院大学史料館

● ホームページもご覧ください

<http://www.gakushuin.ac.jp/univ/ua>